

2018年登録 世界文化遺産「長崎と

天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」

1873年

解禁

1865年 信徒発見

1637~1638年

伝来

1550年

禁教

1614年

繁栄

潜伏

1644年

1797年

ブティジャン神父

キリスト教の解禁後、それぞれの潜伏キリシタン集落では、宣教師との接触により転機を迎え、カトリックに復帰する者、引き続き禁教期の信仰形態を続ける者(かくれキリシタン)、仏教や神道へ転宗する者などに分かれた。カトリックに復帰した集落に建てられた教会堂は、キリシタンの「潜伏」が終わりを迎えたことを象徴している。

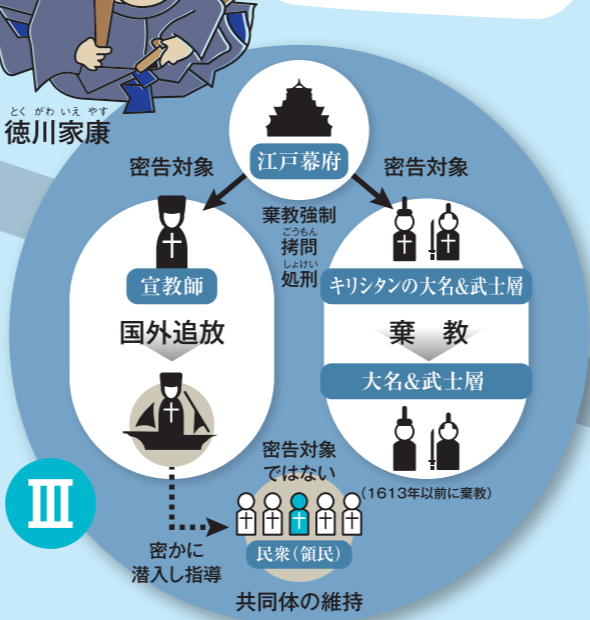
「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、日本でキリスト教が禁止されていた時代に、普通に生活しながら工夫して信じ続けた人たち(潜伏キリシタン)が残した証です。

1549年、鹿児島に上陸。日本に初めてキリスト教を伝えました。長崎県では1550年に平戸で宣教を始めました。

宣教師は、まず大名などの支配階級に接近し、彼らを介した集団改宗などにより領内の民衆にキリスト教が広まった。やがて不足する宣教師に代わり、指導者を中心に自分たちで信仰を強化、維持するための共同体が、民衆の間で形成された。

日本で初めてキリシタン(キリスト教の信徒)の大名になりました。

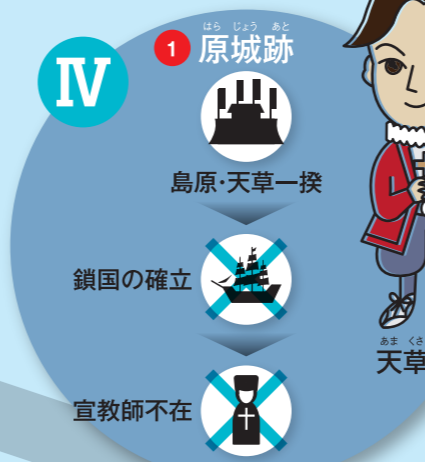
当初はキリスト教を黙認しましたが、徳川氏中心の体制をゆるぎないものにするために禁止しました。



江戸幕府の禁教令によって、密告の対象となったキリシタンの大名や武士などの支配階級は棄教し、宣教師は国外へ追放され、教会堂は破壊された。しかし、宣教師は引き続き潜入を試み、信仰を続ける民衆を指導した。

宣教師がいない中で、一見すると神道や仏教のようにみえる独自の信仰形態はごくみえました。

領主の圧政と飢饉をきっかけに、有馬と天草のキリシタンが原城に立てこもりましたが、幕府軍によって鎮圧されました。



厳しい探索で日本各地の共同体が摘発され、潜伏キリシタン集落の分布は、長崎と天草地方に縮小。信仰が発覚しないよう独自に信仰を実践する方法を模索していった。やがて幕府も、彼らが信仰を表明しない限り、処罰せず「黙認」の姿勢をとった。

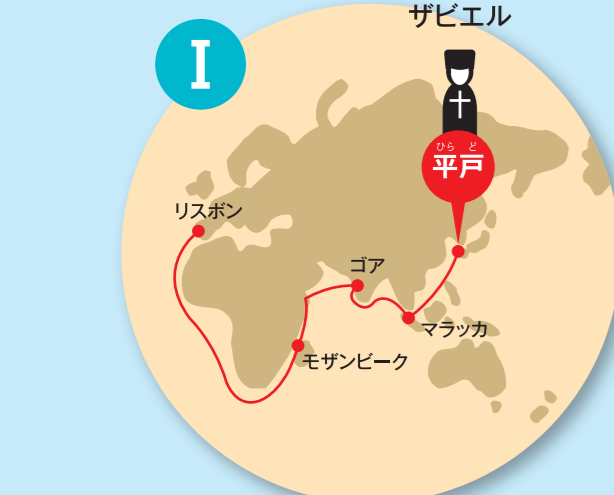
「島原・天草一揆」をきっかけとして幕府は鎖国を確立。宣教師の潜入の可能性のあるポルトガル船の来航を禁止し、最後の宣教師が殉教した。キリシタン探索が強化される中、残された民衆は共同体の指導者を中心に自分たち自身で信仰を続けることを余儀なくされた。

人口増加が問題となっていた外海から、耕作民の不足する五島列島への移住協定が藩同士で結ばれた。外海の潜伏キリシタンは、自分たちの信仰を続けるため、移住先の社会や宗教との折り合いのつけ方を考慮しつつ移住先を選んだ。

自分たちの信仰を告白



大浦天主堂は、日本の開国後に居留地に住む外国人のために建てられました。



大航海時代を背景に、ヨーロッパから見てキリスト教宣教地の東端である日本へキリスト教が伝えられた。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は12の資産で構成されています。

- 1 原城跡
- 2 平戸の聖地と集落
- 3 天草の崎津集落
- 4 外海の崎津集落
- 5 外海の大野集落
- 6 黒島の集落
- 7 野崎島の集落跡
- 8 頭ヶ島の集落
- 9 久賀島の集落
- 10 奈留島の江上集落
- 11 大浦天主堂

(記事提供：県文化振興・世界遺産課)